

---

# 女神サマは俺を祝福してくれるそうだ

紅鋼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

女神サマは俺を祝福してくれるそうだ

### 【Nコード】

N1772BA

### 【作者名】

紅鋼

### 【あらすじ】

不良たちの罠に嵌められ死んでしまった主人公（男）は、違う世界の女神リリス（百合マゾ）によって、元の世界のTVゲームのような世界へとリリア（女）として転生させられてしまった。

一応、主人公転生最強ものとして描く予定です。

## プロローグ（前書き）

初描き、初投稿の作品なので文章や表現、構成などいろいろ拙いところがあると思いますが、最後まで読んでいただけたら幸いです。

## プロローグ

これは、ヤバいかな……

真っ赤な視界、ピクリとも動かない体、徐々に下がっていく体温。そんな状態でも俺は特に焦りもせず、冷静に考えていた。

なんで、こうなっちまったんだらうな……

俺は、何処で道を間違えたんだらうか……

卑怯な手段で空手の全国大会優勝を奪った対戦相手を半殺しにしてやったときか……

強いやつと戦いたいという理由で、カツアゲしている不良を叩きのめして、そいつらのボスを引つ張り出してぶっ倒してやったときか……

まあ、今更そんなこと考えていても意味がないわけだが。まさか、俺を嵌めるためだけにカツアゲしているふりまでするとは思わなかったな。

ごめん、母さん。こんな親不孝息子で……

唯一の心残りは、俺を女手一つで育ててくれた母親に、何のお返しも出来なかつたことか。でも、こんな親不孝息子がいなくなれば、顔も器量もいい母親ならいろいろな人が支えてくれるだらうし、すぐにも再婚相手が見つかるだらう……

結局俺は、全然強くなれなかつたな……

誰よりも強くなりたい、ただその思いだけで俺は色んな奴を叩き

のめしてきた。けど俺はいつまでも強くなる事が出来なかった。体はともかく心が弱いままだった。

もっと強くなりたかったな……

真っ赤な視界が黒く染まっていく中、俺は結局それだけを考えていた。そして全てが真っ黒に染まり、意識がなくなるその瞬間

「見つけました」

そんな声を聞いた。

## プロローグ（後書き）

仕事で忙しいので、更新はかなり不定期なってしまうと思いますが、この続きも読んでいただけたら幸いです。

「……………さい」

声が聞こえる。……………おかしい、あんな状態で助かる訳がないから俺は死んだはずだ。

じゃあこれは夢か？ それとも死後の世界というやつか？

「……………ください」

それにしてはいろいろとリアルだ。日差しは肌を温め、風は葉擦れの音を立てて髪を撫でていく。

そして、肩に置かれた手の温もり、自分の体を揺らされる感覚。

そのどれもが俺が生きていると訴えている。

「おきてください」

そう、はつきりと聞こえたので俺はゆっくりと目を開けた。

「やっと、目を覚ましましたね」

俺の目の前にいる女性が安堵した声を出す。……………ありえないくらいに美人で、白いゴスロリドレス（だと思う）、金髪碧眼。まるで天使みたいだと思った。

「なかなか目を覚まさないので失敗したかと思いましたよ」

「ここはどこだ……………」

俺は目を疑った。俺が死んだのは路地裏で、もし生きていたとしてもここは病院のベッドであるはずだ。間違ってもこんな何処とも分からない草原であるはずがない……………

「ここはですね、なんと異世界なのです！」

「はあ？」

あまりにも突拍子もないことを言われ、間抜けな声を上げてしまっ

「だ〜か〜ら〜、異世界なんですって」

それをどう解釈したのか、目の前の女はさっきと同じことを言う。

……………俺は頭がおかしくなったのか？

「ちょっと待て、いきなり異世界とか言われてもわけがわからん。一つづつ確認するぞ?」

「はい!」

「まず、お前は誰だ?」

「私は人体の創造を司る女神で、真名は、人間には発音も理解も出来ないの、この体の時はリリスと名乗ることにしました!」

……何を言ってるんだこいつはと思いはしたが、話が進まなくなりそうなので声にはださない。

「俺は何故ここにいる?」

「私がこの世界を見て回るためには主となる人が必要で、あなたが私の主に相応しいと思ひ、あなたの体が死んだときに、魂だけを私がこちらに用意した器に入れさせてもらいました!」

……つまり俺は精神をそのままに転生させられたってことか。……ん、用意した器?

嫌な予感がした俺は、慌てて自分の体を調べて愕然とする。身長が百八十あってかなり筋肉がついていた体は、どう見ても筋肉がついていない百五十ぐらいの少女のものだった。

「……で」

「はい?」

「なんで、こんな体なんだ!」

俺は限界ギリギリの声で叫ぶ。

「それは私の趣味です!」

即答で返してきたリリスを思いつきり殴った。

……殴ったら、可愛そうになるぐらいの勢いで、顔面から地面に突っ込んだ。

思っていた以上の力に俺自身が驚いた。さすがにやりすぎたと思つて助け起こそうとする。

「えへへへ、叩かれちゃいました!」

……うん、しばらく放置しよう。

そして、改めて自分の体を見る。



膝下まである編み上げブーツにホットパンツ、後ろ百八十度を隠すような膝まである腰布に袖なしジャケット、指ぬきグローブに腕や足を多少隠すように巻き付いているリボン？ のようなもの。そのすべてが選んだ奴の趣味を疑うような黒一色で統一されている。……胸とお尻はもう少し頑張りましょうってぐらいのサイズ、髪は腰まである銀髪でうなじのあたりで黒いリボンで括ってある。

……間違いなくこんな格好で街中を歩いたら変なやつに絡まれるか、職質されるって格好だ。

「おい」

俺はドスをきかせた声を意識するが、こんな体じゃ正直微妙だ。

「はい！」

それでも多少は効果があったのか、トリップしていたリリスが飛び起きる。

「次の質問だ。何でお前は世界を見て回る必要がある。神ならそんなことしなくても世界を把握できるだろう？」

「それはですね、この世界の神は自分の司る現象を感じ取るにとぐらいしかできないからです。私の場合は人間だけです。だから世界を見たり聞いたり感じたりといったことは出来ません」

「……お前はなんで世界を見て回りたいんだ？」

「簡潔に言えば、自分の仕事の成果をみたいってことになりますね」

「……つまり、人間観察がしたいってことか。」

「それと……」

「ん？」

「あなたについても知りたいですね」

その言葉で顔が一気に熱くなったが、気にしないように話を続ける。

「で」

「はい？」

「俺はどうすればいいわけ？」

「あなたが望むように世界を回ってくださればいいですよ」

「つまり俺のしたいようにしろってことか？」

「はい！」

「ああ……、じゃあまずは拠点となる町と宿を探すぞ。あと、

この世界について知っていることを教えろ」

「はい！」

「やっと着いた」

思わずそう呟いてしまふぐらいには時間がかかった。太陽が真上から沈み始めるぐらいになるくらいは時間がかかった。

実は町を探すといったが、町そのものは最初にいた位置から見えていたので、すぐに着くかと思っただが、予想以上に遠く。しかも、途中でゴブリンやコボルト、ボアなどがおり、それを倒しながら来たのでさらに時間がかかることになった。でも、魔物を倒したので【拳士】と【魔拳士】のレベルが三になった。【拳士】【魔拳士】というのはこの世界のシステムの一つで【職業】というらしい。町に着くまでの間にリリスに聞いた、この世界について分かったことについてまとめると

- ・この世界には【職業】【称号】【スキル】がある
- ・【職業】だけレベルがあり、レベルが高いほど能力値に補正がかかる

- ・【職業】は【職業】のレベルや技能の習得などで手に入る
- ・【称号】は特殊な条件をクリアすることで手に入る
- ・【称号】は【スキル】以上の恩恵がある
- ・【スキル】はパッシブ（毒耐性など）とアクティブ（必殺技など）がある

- ・【スキル】は特殊な条件のクリアと【職業】レベルで手に入る
- ・【職業】によって手に入れた【スキル】は【職業】レベルが高いほど効果が上がる

- ・【職業】【称号】【スキル】は念じると頭の中で確認できる  
こんなところだ。

ちなみに俺の【職業】は【拳士】【魔拳士】で、【拳士】は分かるのだが【魔拳士】は何故ついているのか分からなかったので、リリスに聞いてみたら「攻撃しようとする」と無意識に魔力を臂力に変

えるように調整したからついた」らしい。正直余計なことをと思っただが、こうしないとこの体じゃ魔物で一番弱いゴブリンに負けてしまふスペックだというのでしぶしぶ納得してやった。なので、この体の魔力はどれくらいなのかと聞いたら「格闘戦なら一日続けても余裕があるくらい」といわれた。

【称号】は無く【スキル】は【格闘戦技上昇】と【震脚】と【走力上昇】があつた。【格闘戦技上昇】は徒手格闘の威力が上がる【拳士】のパスシブで、【震脚】も【拳士】の【スキル】だけどころはアクティブで、使うと一定範囲の敵を少しの間動けなくするという効果だつた。敵味方の判定はどうなっているのかと聞いたら、使う本人の認識が判定基準らしい。【走力上昇】は【魔拳士】のパスシブでそのまんまの意味。……ああ、リリスは【職業】【称号】が無く俺のレベルに応じて能力値が上がるらしい。あと【スキル】は【人体修復】しかないので戦闘には役に立たないとのこと。

「さて、まずは冒険者ギルドでせめて今日の宿代だけでも稼いでおかないとな」

「そうですね」

さつさと宿に泊まって一休みしたいが、俺たちは無一文。なので門番の衛兵に聞いたところ、冒険者ギルドがいいんじゃないかと言われた。最初は酒場の給仕などを勧められたが、もっと早く金が手に入り、なおかつ強くなれるものがないと言ったら、それなら冒険者ギルドしかないと返された。君には無理だと笑われたが、俺はお礼だけ言ってギルドに行くことにした。

「しかし失礼な門番ですね、主が弱いみたいにな」

「そんな弱く見える体で作ったのはお前だけだな」

ちなみに主とは俺のことで、リリスがいうには「私はこの世界での使い魔のようなもので、あなたは私の主にあたる」とのこと。

「うぐっ、で、でもそれなら主の強さを見せつけてやればいいじゃないですか」

「どうやって?」

「え、え〜と、門番を倒す……とか？」

「なんで町に着いた早々問題を起こさなきゃならん」

「じゃ、じゃあこの町に来る間にどれくらいの魔物を倒した、とか」

「言っても信じないだろ」

「う〜ん」

そんな会話をしながら歩いていると、注意が散漫になっていたりリスが誰かにぶつかった。

「わぶ」

「いて」

「あ、すいません」

リスはすぐに謝り横を通り過ぎようとするが

「おい嬢ちゃん、ぶつかつといてそれだけってことはねえだろー」  
肩を掴まれて止められた。

「そうそう」

「誠意ってもんが足りねーなあ」

そう言いながら俺たちの周りを囲む酔っ払い男三人。

……どんな世界にもこういうやつらは居るんだな。そんな考えと苛立ちを覚える。

「悪いけど急いでるんだ、役立たずの酔っ払いの相手をしてる暇はないんだ。今ならまだ痛い思いをしなくて済むけど？」

「なんだと！」

少し挑発しただけで見事な釣れように、俺は内心ほくそ笑む。

「ギルドランクEの俺たちがためーみてえな餓鬼に負けるってのか」

「そう言ってるのが分からないくらいに馬鹿なの」

俺はさらに挑発する。俺が欲しいのはこいつらを叩きのめす大義名分だからだ。

「こんの糞餓鬼」

酔っ払いの一人が魔物の解体用のナイフを取り出すとあとの二人

もそれに続く。それを見た遠巻きに見ていただけの通行人が悲鳴を上げるが関係ない。この程度のこと、転生前に何度も経験した。だから俺はさらに挑発する。

「早くきなよ、三人とも叩き潰してあげるから」

「この！」

掛け声とともに目の前の男が切りかかってきた瞬間、【震脚】を発動。相手が止まった一瞬でリリスを囲いの外に投げる。

「ぐべっ」

そんな声が聞こえたが気にしない、俺は動き出した相手のナイフを避け、すぐさま肘に膝を叩きこんで折ってやる。後の二人はそれを見て冷静になったのか、二人同時に切りかかってくる。正直これ以上弱い奴の相手をするのは面倒だったので、体勢を一気に低くし二人いっぺんに足払い、倒れたところを潰れない程度に蹴り飛ばしてやった。もちろん股間を。

「ま、こんなもんか。リリス、行くぞ」

「んふふふ、ふあ！」

トリップしていたリリスが飛び起きて、歩き出した俺に追いつく。

「もつと徹底的にやらなくていいんですか？」

「いいんだよ、やりすぎるとこっちが捕まっちゃう。そのために向こうから手を出させたんだから。それに」

「それに？」

「この程度で済ましておけば、あいつらがもつと強くなって仕返しに来るかもしれないだろ。まあ、卑怯な手段を使ってくる場合はそれ相応の罰を与えてやるけど」

その言葉に何を感じたのかリリスが少しだけ恍惚とした表情を呈するが、俺は気にせずにギルドへと歩いて行った。

## 2 (後書き)

初めて戦闘?のような描写。主人公はなるべくアクティブスキルを  
使わずに戦闘をするということだわりをつけたいです。

「ここだな」

酔っ払いを叩きのめしてから歩くこと十数分、門番から聞いていた盾と剣と杖の看板が出ている建物を発見。

「みたいですね」

「……一つ言っておくぞ」

「はい？」

余計なことかもしれないがこれだけは言っておかないといけない。

「もし、中で絡まれたとしても可能な限り無視しろ」

「ええー」

「わ・か・つ・た？」

極上の笑顔で言っていると、リリースは何度も頷いたので了承したとして続ける。

「じゃあ入るけど、絶対に食って掛かったりするなよ？」

「は、はい！」

再度言い含め、解放されている入り口をくぐる。

入った瞬間俺たちを見て黙り込む冒険者たち。一瞬なんだこいつらは？ みたいな目で見えてきたが、気にしないことにしたのか、さつきまでしていた会話に戻った。俺としては少し予想外だったが、まあ【職業】もあるんだしこんなものかと一応納得しておく。

「さて、受け付けはどこかなつと」

ギルド内を見回すとそれらしいカウンターが二つほどあったので、散りあえず正面のほうに歩く。

「本日はどのようなご用件でしょうか？」

「えーと、ギルド登録？ をしようと思って」

「ギルドへの登録は大銅貨二枚が必要になりますがよろしいですか？」

「えっ、まじで」



その言葉にどうしたもんかなあと思索する。金がないからここに来たのに、金がないと登録できない。なんとという本末転倒。

……おっと、そういえば。

「なあ、魔物から得たアイテムってどこかで換金できない？」

ここに着くまでに倒した魔物が結構落としていたのを思い出す。

……この世界の魔物は、倒すとアイテムをいくつか残して消滅する。最初は驚いたが、ここは異世界なんだし元の世界を基準にして考えてたらこれから先ついていけなくなる気がするので深く考えないようにした。あと、アイテムはリリスが気づいたら持っていた肩掛け鞆の中に入れてある。どう見ても容量的にそんなに入りそうにないが、なんでも空間魔法が使われていて、千種類のアイテムを百個ほど入ることが出来、重さも感じなく、状態も入れた時のままなんだとか。そんな馬鹿なと思つて手を突っ込んでみたが、手はどこまでも入り何も掴むことは出来なかった。しかし、手を入れた瞬間から頭の中にリストのようなものが表示され、それを選んだら突っ込んだ手にアイテムが掴まされていた。結構驚いたが魔物が消滅するのを見た後なので気にしないことにした。……ちなみに鞆はどこにあったのかを聞いたら、転生したときに座っていた俺の尻の下に敷かれていたらしい。そのときリリスが鞆に頼ずりしてて気持ち悪かったので一発殴つておいた。

「アイテムの換金はあちらの受け付けになります」

「ん、ありがとう」

一言お礼を言つて入り口右手にあるカウンターに向かう。十数人ぐらい並んでいて、後ろのほうの人は俺を見て驚いた顔をしている。「どうかしましたか？」

なるべく波風が立たないように一番近いお兄さんに聞く。……別に俺は誰彼かまわず闘いたいわけではなく、さつき叩きのめした酔っ払いみたいに他人に迷惑をかけるやつは例外で、基本的に年上には敬意を持って接している……ホントダヨ？

「いや、お嬢ちゃん達みたいに可愛い女の子が二人だけで魔物を

倒していることに驚いたんだ」

「え？ 何かおかしいですか？」

「というか、実質魔物倒してたの俺だけだし。」

「うん、君たち武器も持ってないみたいだし、どうやって倒したの？」

「普通に殴ったり蹴り飛ばしたりですけど……」

「え？」

「え？」

俺何かおかしいこと言った？ 【職業】に【拳士】があるんだか

ら、別に何も問題ない気がするけど……

「えーと、それはほんと？」

「本当ですけど？」

別に嘘言ったって得しないし。

「失礼だけど【職業】とレベルは？」

「【拳士】と【魔拳士】でどっちもレベル三ですね」

言った瞬間兄さんがぼかんとした顔をする。

「どうかしましたか？」

「いや……、【拳士】はまあいいとして【魔拳士】っていうのはかなり珍しいし、こんなに若い子が技能で手に入る【職業】を二つも持っていることに驚いてね」

「？ 【職業】を二つ持つてるのはおかしいですか？」

「そうだね。基本的に【職業】は【職業】レベルが百になったときにその【職業】の上位職が出たり、特定の技能の習得によって手に入るものだから、君みたいに若い子が技能で習得出来る【職業】を二つ持っているのは凄いと思うよ。あ、あとギルドの所属でもそのギルドの【職業】が手に入るよ」

それは初耳だ。俺には最初から二つあったし、リリースの説明で【職業】は複数持っているのが当たり前みたい感じた。……そうかギルド職なんてのもあるのか。チラッとリリースを見てみたが首を横に振っていたので知らなかったみたいだ。

「教えていただきありがとうございます」

「い、いやそんなお礼を言われることじゃ……」

「いえ、知らないことを教えてもらえることはとても幸運なことですので」

笑顔でお礼を言ったらお兄さんは少し後ずさった。……ちよつとシヨックだった。……そういえば今の俺は美少女（リリス談）らしいので、お兄さんは照れただけなのかもしれない……よく見たら顔が少し赤いような気がするから照れただけ、そう思っておこう。

「そ、そういえばまだ自己紹介がまだだったね。僕の名前はクリフォード。まあ皆はクリフって呼んでるかな。【職業】は【剣士】と【冒険者】でレベルは二十六と十九だよ」

「俺の名前はリリアで後ろのはリリスです」

お互いに手を出して握手する。……ちなみにリリアは俺の名前だ。この体で転生前の名前を使うわけにもいかなかったため、リリスがすでに決めていたこの名前で行くことにした。

「ところでそっちのリリスちゃんはリリアちゃんとういう関係なのかな？」

……正直くると思っていたけど、どう答えたもんかと悩んでいるとリリスが自分で言った。

「私は主の使い魔の精霊です」

「は？」

うん、クリフさんが固まった。今までで一番固まった。……リリスは本当は女神（と本人は言っている）がそれだといろいろ問題があると思ったので、他の種族を名乗れと言ったら本人がこれ以外嫌だと拒否した。それでも問題はあったが本人の意思を尊重した結果、リリスは精霊ということになったがやはり問題があったみたいだ。

「……は！」

あ、再起動した。

「えっと、リリアちゃんは【拳士】と【魔拳士】なんだよね？」

「あ、はい」

「【魔術師】は持ってないよね？」

「持ってませんけど……何かおかしいんですか？」

自分でも少しおかしいと思うが、俺はこの世界の常識を全く知らないで今のうちに聞いておこうと思う。

「ああー、でも【魔拳士】あるってことは魔力が結構あるってことだから……」

クリフさんが一人で納得するが、俺には分からないことなので分からないことなので首を傾げていたら教えてくれた。

「ええーとね、使い魔は基本的にソコの【魔術師】が魔力の供給を代償に契約するもので、主に魔法が効かない敵の対策としてが多いね。だから精霊みたいに魔法がメインな使い魔は珍しいかな。それとリリスちゃんの実体化してるよね？ 実体化はかなり高位な精霊しか出来ないから供給する魔力の量が半端じゃないくらい多い。だから高位精霊を使い魔にしてる人はかなり少ないかな」

「そうなんですか」

「ちなみにリリスちゃんは何ができるの？」

少しわくわくした様子でクリフさんが聞いてきたのでリリスが答える。

「そうですね私の【人体修復】はかなり高度な治療魔術のさらに上のものです。魔力さえあれば死んでいない限り、万全の状態まで持っていきます。でもあくまで修復なので、生まれつきなかった腕や視力などは治せません。それと、ちぎれてしまった腕などは腕が残っているかどうかで魔力の消費がだいぶ変わりますね」

「凄いな……」

クリフさんがかなり驚いた様子で言った。

「というか、そんな【スキル】があるならそれだけで貴族並みの生活が出来るでしょ？ 何でこんなとこに来てるの？」

「えーと、俺の目的は強くなりたくて、リリスの目的が世界を見て回りたいだからですね」

「そつか。あ、あと気になったんだけどリリアちゃんはなんで【拳士】と【魔拳士】なの？」

「はい？」

「だつて魔力を膂力にする魔系の【魔拳士】なんかは武術系の【職業】に魔力制御が必要になるからね。魔系の【職業】を手に入れようと思つたら、【魔術師】になつて魔力制御を身に付けてから手に入れるのが当たり前前みたいだよ。だから、リリアちゃんが【魔術師】を持ってないのがなんでだろうなあつて。まあ、持ってない人もいない訳じゃ無いんだけど、かなり少ないみたいだし」

この質問は困る。滅茶苦茶困る。そんなこと今知つたから全く言い訳を考えていない。それでもひねり出して答える。

「それは……、俺は【拳士】の修行をしてたんですけど、いつの間にか手に入つてた？ という感じですかね？」

「いや、僕に聞かれても困るよ。でも、世の中にはそんな天才さんもいるのか。じゃあ他の人もそんな感じで手に入れたのかな」

一応転生前は空手界の期待の星と言われていたこともあったので、間違つてはいないと苦笑する。

そこで、やつとクリフさんの順番が回ってきた。

「お、僕の番だ」

そう言つてカウンターのの上に腰に下げていた道具袋をの中身を置いていく。……正直かなりの量だ。魔物三百体ぐらいの量があるんじゃないかと思う。

「多いですね……」

「それでもないよ。パーティーを組んで朝からダンジョンに籠つてればこれぐらいはいくよ」

「こんな若い子に嘘教えんじやないよ。こんな数こなすのはこの町じゃあんたのパーティーだけだ」

本当かどうかわからなかったが、受け付けの人が教えてくれる。

「他のパーティーじゃこんな数こなす前にダンジョンから出てくる時間になつちまうよ」

「あのー、ダンジョンってなんですか？」

この言葉に二人は面食らっていたが、知らないものは知らないんだから仕方ない。

「ダンジョンってのは神様が作ったものって言われてるね。何せ壁とかが一切破壊出来ないし、魔物はフロアごとに一定数以上になるようになってるし、たまに宝箱が出現したりするし」

受け付けの人が親切に教えてくれる。

「へー」

これを聞いてリリスを見るが、やっぱり首を横に振る。リリスは人間や亜人のシステムにしか関わっていないので他のシステムについては一切知らないらしい。ちなみに亜人にはまだ会っていない。この国には亜人が少ないのだろうか？

「だからダンジョン探索は冒険者の収入源の一つってわけ」

「教えていただいてありがとうございます」

俺は素直に頭を下げてお礼を言う。

「……冒険者になるうつつてのに妙に礼儀正しい子だね」

なにか変だったろうか？俺は普通にお礼を言っただけなんだが。「まあいいさね、お礼を言われて悪い気はしないからね。じゃあクリフ、これが今回の換金額であんたのパ・ティー四人で分けられるようにしといたから」

「お、相変わらずブレアさんは気が利くねー」

「ほら、お嬢ちゃん。これが普通の冒険者の反応だよ。お礼なんて言いもしない」

「いやいや、言わないだけで皆凄い感謝してますって」

「そうかい」

「ははは……」

そんなやり取りに思わず苦笑する。

「じゃありリアちゃん僕は仲間のところに行くけど、もしパーティーに入りたかったりしたら遠慮なくいつてね。多分、皆歓迎してくれると思うから」

「あ、はい。ありがとうございます」

そういつてクリフさんは入り口左手にある酒場みたいなところに歩いて行った。おそらくここで冒険者は一時的なパーティーを募ったり、依頼の達成やダンジョン探索終了などの乾杯をするのだろう。……あ、クリフさんが男の人にヘッドロックをかけられている。彼が残りの三人の人の一人なのだろうか。クリフさんはヘッドロックされながらも笑顔だった。

正直羨ましい、転生前の俺にはそんな仲間は一人もいなかったから。いや、いなくなってしまうたから。いつの間にか母親以外は俺を避けるようになっていた。まあ仕方がないことだろう、俺は不良しか殴らなかつたが周りから見たら俺も立派な不良だったんだから。それでも、幼馴染は結構最近まで一緒にいた。やっぱり最後にはいなくなってしまうたけど。……あまり考えると暗くなりそうなのであまり考えないようにしよう。

「さて、じゃあお嬢ちゃんは初めてみたいだから一応自己紹介しておくよ。あたしの名前はブレアっていうんだ。歳は……まあご想像にお任せするよ」

「あ、俺の名前はリリアで歳は十五歳です。後ろのはリリスで歳は……」

そういえばリリスの歳って何歳になってるんだ？俺の今の体の歳は名前と一緒に教えてもらったけど、リリスの歳は聞いてなかったのでもリリスに視線を送る。

「内緒です」

唇に指を当ててリリスが言う。……美少女がこれをするとかこんなにも様になるのかと思ったのは内緒。

「はっはっは、まあ、女の子には秘密が多いつてことさね」

そんな答えでも、ブレアさんは少しも気にした様子はない。

「じゃあ、リリアちゃんたちの換金したいアイテムを出してくれるかな」

「あ、はい。リリス」

「はい」

リスの鞆から手に入れたアイテムをカウンターに載せていく。と、ブレアさんがボアのアイテムを見たら少し驚いていた。

「これは……、これ本当にリリアちゃんたちだけで集めたのかい？」

「そうですね?」

「いや、このボアの毛皮はボアを打撃系の攻撃のみで倒さないといけないから、リリアちゃんみたいな細身の子が手に入るものじゃないと思うんだけど。リリアちゃんの武器は剣じゃないのかい？」

「俺、武器は持ってないですね」

そうだったのか。本気ダッシュのラオーダーキックとかかと落としで倒せたし、毎回肉と皮を落としてたからそういうものなんだと思ってた。

「てことは、リリアちゃん……そんな細身で【拳士】なのかい？」

「そうですね。あと【魔拳士】も持ってます」

「……!」

俺がそういうと、ブレアさんは言葉も出ないぐらいに驚いていた。

「こりゃたまげたねえ、私はこの仕事初めてもうだいぶ経つけど、リリアちゃんくらいの歳の子で魔系の【職業】持ってる子は初めてだよ」

「そうなんですか?」

「そうなのよ、前に【剣士】と【魔術師】を持ってる子がいたけど、その子でも魔系の【職業】を手に入れるのに数年かかったからね」

「へー」

「リリアちゃんはきつと大物になるわ、私が保証しちゃう」

「あ、ありがとうございます」

そんなことを言われるとさすがに照れる。……リス、そんなに胸を張るな。お前の胸は俺の体より大きいんだから、俺や周りの人の目に毒だ。



「じゃあ、これ以上時間がかかると後ろのおっかないお兄さんたちが、リリアちゃんたちに悪戯しちゃうかもしれないから換金するわね」

ブレアさんにそう言われて、後ろに並んでた人たちが色んな声を上げたが、ブレアさんは全く気にしない。

「ボアの毛皮と肉が二十三個、銅のナイフが六個、銅の剣が四個、合わせて大銅貨五枚、中銅貨七枚、小銅貨六枚だね」

「ありがとうございます」

そう言われて、貨幣の入った袋を渡される。正直内訳は分からなかったが、これでギルド登録料が手に入ったのでよしとする。

「それじゃありリアちゃん、これからも頑張つてね」

「あ、はい」

ブレアさんが手を振ってくれたので、俺も手を振りかえす。さて、それじゃあ登録しましょうかね。

### 3 (後書き)

疲れました。ただでさえ書くのが遅いのに、予想以上に長くなっちゃったのでぶつ通しで八時間以上書いてます。けど、まだまだ書きたいと思っている自分がある……自分はマゾだったんだろうか……いやそんなことは無い、自分はどSなはずだ。女の子をロープで縛るとかまじ大好物。はあ、早く主人公無双とリリース苛めを書きたい。(リリース苛めは忘れてしまいそうです)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1772ba/>

---

女神サマは俺を祝福してくれるそうだ

2012年1月9日06時54分発行